

秀頼版「帝鑑図説」 慶長十一(1606)年

レファレンス課 伊豆田 幸司

「歴代帝鑑図説」の成立：

秀頼版「帝鑑図説」は、明の内閣大学士であった張居正(ちょうきよせい)が1572年に皇帝(神宗万曆帝(しんそうばんれきてい))に進上した「歴代帝鑑図説」を底本としてつくられた。

神宗の教育係でもあった張居正は、古代～宋時代の通史の中から為政者として勸戒すべきエピソードを抽出し、ダイジェスト版帝王学教科書とでもいうべき二冊組の書物を作り上げ神宗に進上した。これが「歴代帝鑑図説」である。



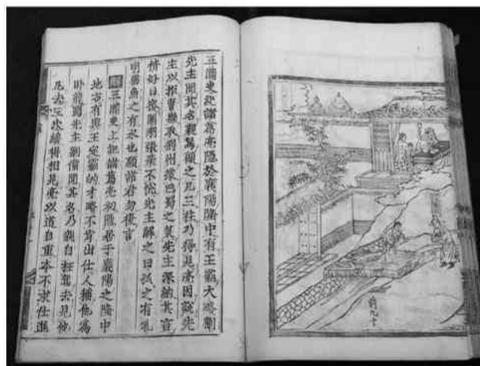
帝鑑図説無跋本 第一冊

体裁は、エピソード毎に漢字四文字のタイトルを付け、文語体で簡潔に史上の出来事を紹介、その後で「解」という口語体の説明文を載せている。また各話には全て挿絵を載せ、視覚的にも理解しやすいものになっている。

収録されている内容は、為政者が手本とすべき行いについて書かれたものが八十一話、戒めとすべき行いについて書かれたものが三十六話で、これは陰陽の陽数である九と陰数である六をそれぞれ掛け合わせた数字にちなんでいる。また皇帝と臣下のあるべき関係を説いたものが多く、張居正が理想とした政治

体制(明初期の皇帝親政)の指針を暗に奏上したのだとも考えられている。

取められたエピソードの中で日本人になじみが深いものとしては、蜀の昭烈帝(劉備)が諸葛亮を三顧の礼で迎え水魚の如く交わった故事「君臣魚水」や、伝説上の王である夏の傑王が寵愛した喜の言うままに蕩尽の限りを尽くし、酒池肉林の語源ともなった「脯林肉池」等がある。



有跋本 第二冊より「君臣魚水」の項

皇帝へ進上された「歴代帝鑑図説」であったが、その翌年には早くも官版が出版されている。秀頼版は、この官版を元につくられたものである。

朝鮮伝来の活字版：

1500年代末から1600年代前半にかけて、わが国では多くの活字印刷物が刊行されている。これは、豊臣秀吉の朝鮮出兵時に戦利品として持ち帰られた銅活字とその技術によるところが大きい。

例えば朝廷では、秀吉が献上したとされる銅活字を使用して朝鮮出兵の翌年にあたる文禄二(1593)年に後陽成天皇により「古文孝経」

が開版されたのを初めとして、数度にわたり勅版事業として活字印刷物の刊行が行われた。

徳川家康もまた数々の活字印刷物を刊行させた。家康は慶長四（1599）年に木活字の製作を命じ、同年それらを用いて「標題句解孔子家語」「六韜（りくとう）」「三略」を刊行させた。これらはいわゆる「伏見版」の最初とされる。続く慶長五（1600）年には「貞観政要（じょうかんせいよう）」の刊行と「六韜」「三略」の再版が行われた。刊行された書物はいずれも中国の政治・思想書であり、刊行事業を通して自らの政治方針を広く知らしめる意図があったと考えられる。また家康はこれより後に、鑄造した銅活字を用いた活字印刷物の刊行も行っている。こちらは「駿河版」と呼ばれている。

秀頼版「帝鑑図説」：

豊臣秀吉の子秀頼も、家康の「伏見版」刊行事業に後れること七年、慶長十一（1606）年に「帝鑑図説」を刊行させた。これが今回紹介する秀頼版「帝鑑図説」である。ちなみに本書は秀頼の愛読書でもあったという。

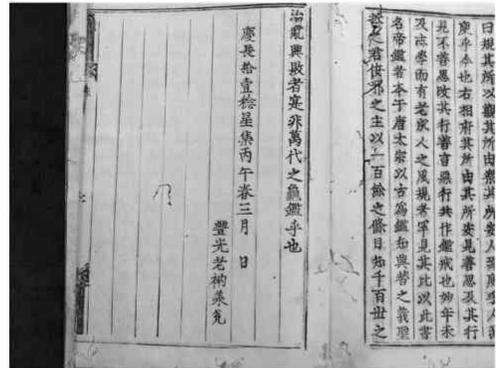
全六冊からなる本書は、文章部分は木活字を用い挿絵は整版で印刷されている。精緻な書体の活字と官版を模して作り起こされた挿絵は見事な調和をみせ、美術品的美しさを漂わせている。

挿絵の製作者については狩野派の画家狩野一雲の手によるという説もあるが判然としない。しかし後に狩野派によって題材とされた「帝鑑図」と共通点が散見されることから、狩野派の絵師が製作に関わった可能性も指摘されている。

また秀頼版には当時相国寺住持であった西笑承兌（さいしょうじょうたい）の跋文（ばつぶん）を載せた有跋本（六冊中第一、第五冊欠）と、徳川家にはばかってその部分を削除して出版されたと考えられる無跋本（六冊完本と六冊中第六冊欠）が存在し、当館ではその両種を所蔵している。

※カッコ内は所蔵状況。

なお本館では、寛永四（1627）年に京都の八尾助左衛門尉によって出版された仮名版「帝鑑図説」（十三冊組、内第十三冊欠）も所蔵している。



有跋本 第六冊末にある西笑承兌の跋文

主な参考文献（順不同）：

- ・木宮泰彦「日本古印刷文化史」富山房 1965年
- ・長澤規矩也「和漢書の印刷とその歴史」吉川弘文館 1952年
- ・陳舜臣「人物中国の歴史8」集英社 1982年
- ・桜井俊郎「万暦初政の経筵日講」と「歴代帝鑑図説」大阪府立大学紀要 人文・社会科学49号
- ・橋本慎司 青木克美「資料紹介 安政五年版『帝鑑図説』」栃木県立博物館研究紀要-人文-17号 2000年
- ・野口鐵郎「資料中国史-前近代編」白帝社 1999年
- ・岡田英弘「絵で見る中国の歴史6」原書房 1995年
- ・井上富佐代「豊臣秀頼」青濤社 1983年
- ・井上安代著「豊臣秀頼」1992年
- ・印刷史研究会編「本と活字の歴史事典」2000年
- ・中根勝「日本印刷技術史」八木書店 1999年